

ミオヤの光 心光の巻

安心と開示	一	光明	二二
人格の本尊	三	光明を要する人	二六
宗教心	五	大ミオヤの聖旨	二七
観音頂上の彌陀	七	衣	二八
観音の胸に輝ける瓔珞	八	食	三一
歡喜光	一一	住	三四
ミオヤ	一二	会報	三八
聖子の自覚	一八		

安心と開示

宗教心には安心の決定が最も大事であります。若し安心にして誤らんか萬行徒らに施す即ち功なきに至ります。されば宗教は靈的に活ける靈界の教師に就て教を請けざれば眞實の信仰が靈的に復活することができぬ。夫れに安心の決心も大事である。宗教の安心は催眠術の開示と同じ。世のかよはかな安心は現在を靈的に活す功用がない。念佛すれば現世にはかわつたことなけれども死後に必ず浄土に生ずると、只念佛は未來往生の爲であると。凭る安心を以ては逆も現在即今靈的に復活することはできぬ。例へば催眠術を施して術者が被術者に對して汝が病氣若くは性癖が今はとても治せぬけれども遠き將來には治るとの開示を強く與へたならば逆も速座に病の効能はない。夫と同じくいかに熱心な信仰を以ても未來死後の往生の爲めと云ふ安心の下には現在に心靈復活して靈的に活ることができぬ。世に善知識と云は信仰を以て心靈を治す良師を云ふ。自から靈に活る知識は自己の胸中に輝く如來の靈的生命が常恒に心

中に活躍しつゝあり、故に之を以て以心傳心的に感應せしむ。其が爲に人に安心を勧むるに現在より如來は靈的に活することを示す。

念佛は是衆生を靈に復活せしむる如來の靈力なり。衆生念佛すれば如來もまた衆生を憶念し玉ふ如來の靈力を被むるが故に我等の靈は活かざるゝなり。

我らは赤子である、赤子は親の慈悲の乳に依らざれば育たぬ。我らが靈は如來の靈乳に養はれて育つ。

宗教心の安心と云心の安謐方が現在から念佛して靈に活きんとの安心が大事である。靈に活けることなき安心を教ゆる教師は眞の活る善知識に非ず。

家庭に於て子女を教育するに此子は意氣地なしであるとなつて遂には意氣地なしと云て叱りて計りあると夫が其子女の精神に開示となりて遂には意氣地なしと化してしまふと云ふ。信仰の安心の据置方が開示であるから安心を未來の往生と開示するは人を精神的に復活すべきことは得て望むべからずである。蔽し現在より心靈が復活せんと欲せば如來の光明は靈を活すの靈力なり一心に念佛すれば必ず靈的生命と成り得らるゝとの安心は必ず人の心靈を現實に活す力なり。凭の如きの因縁を以て安心は開示として人に死活的動機を與ふ故に頗る大事なりとす。

人格の本尊

光明主義の本尊は永遠に活ける彌陀尊なり。理想最高の本尊は絶対的宇宙の中心最高處に儼臨し玉ふ獨一不二の無上尊にして一切諸佛萬法を統攝し玉ふ最尊者にして一切萬行の歸趣する處の靈體なり。如來は唯一不二にして而も一切の信者の爲に各自の信仰に應じて靈應の身を分て其人の前に在ります、衆生の心の中に住し玉ふ。衆生の心相各々不同の故に感應する處の身色相好もまた不同。但歸する處は其人の信仰の本尊と爲りて一切の處、一切の時に於て其人の心意を開攝し指導し益々向上せしむる活ける本尊なり。若し小乗教に於ては五分法身を各自の本尊とす。

釋尊御八滅に臨み玉ひて、若我世に住すこと一劫すとも會ふものは亦當に離なべし。會ふて離れざること終に得べからず。自利々人の法皆具足せり、若我久しく住すとも

更らに益する所なげん。應さに度すべき者は若は天上人間皆悉く已に度しぬ、未だ度せざる者には皆亦已に得度の因縁を作りぬ。自分已後我諸の弟子展轉して之を行せば則是如來の法身常在にして滅せざるなり。

如來の法身常在不滅の法身を以て小乘教にては五分法身また波羅提木叉と名づく。開く所によれば印度の小乘教にては得度式の作法に依りて五分法身を授け开が其得度者の頭腦の中の本尊として斯戒體が発得して精神生活を支配するに至ると。

今大乘教にては教祖釋尊已に初めて正覺を成し已るや焚網戒三昧に入て本佛盧舍那を本身として千と百億との釋迦は各無數の眷屬と共に本佛を圍繞して本佛より道徳の根本たる戒法を聞くと。然れば即ち人佛釋尊の精神界には常に本佛盧舍那佛が道徳律の本尊として常に儼臨し玉ふこと必せり。盧舍那佛即ち彌陀尊なり。已に信心獲得したる上にはナムアマダ佛が實現し來たる。

ナムとは我等衆生の心の全心全幅を献げて歸命信賴することなり。阿彌陀佛は我等が信念の前に大威神大智恵大慈悲を以て常恒に儼臨し玉ふ靈體なり。ナムアマダ佛と申す時、ナムの信念の前に彌陀世尊儼臨し玉ふ。至誠心の念佛の前には彌陀現在し玉ふなれども衆生の信心の鏡臺の故に現前せざるなり。導師曰く、彌陀身心遍法界。映現衆生心中。

宗教心

人は宇宙の中心なる獨尊の實在を信じて眞實に尊敬し信賴するときは自己の中心靈性が開發す。自己の靈性は自己の尊き性である。尊き性が開顯する故に大なる尊格を信認することが得らる。

自分の靈性、尊き性を以て客體の尊き靈體が信られる。大小異なれども其性質同き故に。見よ、動物の如き卑劣なる性を以ては大なる尊體を信認することはできぬ。其性質が異にして感應すべき理がない。鑛物の中金剛石の如き貴金屬にして始めて日光が映射する。瓦礫には日光反映せぬ。動物的の性には如來の靈體は反映せぬ。性格に於て異なるが故に。故に動物には未だ高等なる宗教心は顯動せぬ。人には如來光明

を反映すべき靈的寶石の材質を藏して居る。然れども此寶石を琢磨するに非ざれば如來の光明反映せぬ。金剛石の如き堅固なる質の物は灰や砂を以て琢磨することはできぬ。夫と同じく人の最高等なる宗教心即ち彌陀の日光を反映すべき金剛の信心は迷信やまた野狐禪的やまた只實質なき言語の說法を聞く位で發揮すべき靈性ではない。寶石を磨くには只金剛砂を用ゆる如く、人の靈的寶石を磨くには一心念佛三昧にあらざれば琢磨の功が顯はれぬ。只念佛三昧即ち彌陀の靈力との最親密なる佛心衆生心との合致すべき三昧のみあつて靈性を磨くべし。若し靈性顯示する時は彌陀の日光反映す。此三昧に依つて磨かれ發揮する宗教心。

此尊貴なる靈性に彌陀の日光反映する時は是靈的人格、宗教界の偉人なり。眞實に活ける宗教家なり。只文字言語のみの僧侶居士などの窺ひ測るべき處にあらず。

人の靈性は、精神中の奥底に伏在す。金剛石は琢磨することは容易に非らず。其容易ならざる處にまた貴重なる價値あり。念佛三昧の至誠心あれば何人も成熟す。三昧琢磨の功顯はれたる金剛石、常に彌陀の日光を映射する人の頭上には常に靈的光明放射しつゝあり。

觀音頂上の彌陀

念佛者の信心を代表する觀音の頭上に彌陀尊を安置す。善く琢磨せる光に彌陀の日光反映して其が彌陀の靈に充さるゝ觀音の宗教心なり。頭上に彌陀を頂けるは是觀音の知見開示して彌陀を知見し彌陀の聖意に悟入せる態の表明なり。頭上に然る如く觀音の胸臆には即ち内容的に於て彌陀と親密なる融合、入我々入是れ神秘的の奧妙に於ては言語の及ばざる處。西藏佛教に異性相抱の繪畫を以て神秘的威情の内容を表明す即ち神人の靈的融合の心象を標現したるものなり。

觀音の胸に輝ける瓔珞

觀世音は金銀摩尼眞珠る寶石等あらゆる珍寶を以て瓔珞と爲して相好圓滿の身を莊嚴す。是何の表明ぞや。是觀音は一切の菩薩の萬徳を代表する靈的人格として我等

彌陀法王を信念する人の人格を即ち品性を造るべきことを表はし玉へり。諸の瓔珞の寶珠は人格莊嚴の萬德なれば是菩薩の願行を表はす。若し念佛して彌陀の光明に靈化して人格革新し彌陀の聖意を我意とし彌陀の聖德を體現するに至れば是觀音の分身なり。たとひ完全なる觀音の萬德を體現するに至らざるも一分彌陀に靈化せらるれば一分の德が備はりて一分の體現が得らる。

歡喜光 (法喜と禪悅)

法喜は法悦とも云ふ。是は已に信仰の生活に入りし人の感情的の心理状態である。

人は心靈開發する時は心機一變し、未開の人は心の生理的の機定に閉塞せられて自然と不靈福の状態である。未開の心理は恰も開くべき花が未だ開けざる時の如くに、苦慮するの因もなきに苦慮し、恰も味腺と木の人は貴人に對する時は、俗に云ふハニカムと云ふ如くに、大なる如來の中に在り乍ら神心は開發意解せざるは是常人の自然なり。人は靈性具有すれ共開發顯動せざる間は、例へば金剛石の未だ琢磨せざる時の如くに不靈福の状態である。若し人一度念佛三昧の功果として心靈が顯化する時は心情の状態が平和に心廣く體胖かに、狹き一室に閉塞せられたる人が廣き天地に開かれたる如く、靈的氣分が内に充ち如來大慈の光明の裡にある状態。恰も陽春和氣に花開き麗はしきを呈し覆郁として香を流すが如く、歡喜内に滿ち靈感極まりなし。此靈的氣分を法悦と云ふ。常に平和に斯の如來大慈光明裡に生息する心は歡天喜地常盤の春永へに靈感極りなきを感ず。已に開發する時は心情自己が靈福態と成りし人なれば此心情を以て萬物に待せば萬物皆悦を以て我を迎へ、鳥歌ひ花舞ひ、同じ花月を眺むるにも自己の心の靈妙態と爲りたれば、花も開く希有の色、月も眞如の光を放ち、萬境悉く靈象ならざるはなし。若し爰に至つて釋尊が自己の靈的經驗より證明なきれた經、例へば阿彌陀經に彼佛の國土には常に天樂を作す、黄金を地と爲し、晝夜六時に曼荼羅華を雨らす、等の文々句々悉く自己の靈が共鳴して淨土の樂地自己の心に實感し顯現す。故に自己の靈性活動し來つて淨土の經典を播く時は、經の文々句々悉く活きたる淨土の莊嚴が自己心眼の前に實現し來りて、昔數千年前の說法は我眼前の

靈境界となる。亦人は例へば人の非常に歡樂を感ずべき境に臨んでも内心に悶ゆる時は歡樂を感ぜざる如き、經に謂ゆる昏朦閉塞して愚惑に覆はれ、惡氣窳冥にして妄に事を興すとは是味味なる人の心理状態である。經に無量壽佛が七寶の講堂に於て大衆の爲に法を宣王ふ時に道教を宣妙法を宣揚し歡喜せざるなし、心解得道し歡喜無量、即時に方より自然に風起て普く寶樹を吹ひて五音聲を出し。無量の妙花を雨して風に隨つて周徧す、自然の供養是の如く絶へず、一切の諸天皆天上百千香萬種の伎樂を齎して其佛及び諸の菩薩聲聞大衆を供養す、普ねく花香を散し、諸の音樂を奏し、前後に來往して更く相開避す、斯の時に當つて樂怡快樂勝へて言ふべからず、

と。斯の如きの文字も若し能く自己の靈性開け來つて看る時は決して形容の詞にあらすして全く高等なる宗教心の實感すべき靈境なり。自己に歡喜光が自己の心情中に融化する時は釋尊實験の說の如きは實に唯共鳴するの外は非らずして自己の靈心に現する機會ならざるはない。また唯佛陀心靈實驗の談を以て自己の靈性の感鳴するのみに非ず宇宙一切萬有悉く如來の法身の顯現にして何かは法悦の感を動す機會ならざるはなし。

鄙にも都にも例へば人が自己胸中に一物なく萬物見る物聞く物として樂からざるはなしと云ふに樂しみは人間の造りたる大都會の中に演出する快樂もまたすべて都會の娛樂は多くは人工的である廓大なる建物の中に眼を眩暈し耳を悦ばしむるものを以て人に歡樂を興ふ。然るに田舎山村僻邑の地に至れば山に水に自然の美天然の風致また人工の及ばざる趣味あり此中に亦自然の樂あり。然るが如く淨土の一切五妙境界の美觀は佛智所成の顯現にして其美微妙奇麗なる亦言思に絶したり。然れども娑婆の自然の風致は法身の顯現にして一切萬物の中に自然の界をなし風趣を供ふなり。是恰も田舎の如く若し夫れ自己の心靈開發し彌陀の靈に醒むる時は娑婆は娑婆としての法悦を感ずべき萬境なり。淨土は淨土として五妙境界の微妙莊嚴ならざるなし。此らはすべて法悦の狀態とす。

禪悅

三昧樂とも云ふ、心靜なる定中に深く内的靈感の感情に於て感ずる心狀。定中の微妙なる喜樂を感ずる之を神悅といふ。禪定に入る時は初め種々の覺觀が交々現前して心境冥合し難し漸々心が微に入り細に動き徐々と進行する時は種々の覺が生ず。覺とは定中の廉相の念にして、彌陀を念するに彌陀を専ら思想觀禪する廉念なり。即ち想像を以て彌陀を念するなり。觀とは徐ろに微に入り細に亘りて彌陀を念するに在るが如き（以下斷絶）

ミ オ ヤ

宗教心即ち信仰を立てんには先づ第一に私共を攝取て救ひ下さる所の大慈父、即ち一りの大ミオヤの實在を信じて之に歸命信賴する處に宗教心は成立つものである。一切の衆生を悉く我子としてすべてを平等の慈悲を以て無條件に攝取て救ひなさる處の大ミオヤの在りますことを信するのである。

我等が教祖釋迦牟尼が此世に出ましたのも若し宗教的に云はゞ宇宙に唯一の大ミオヤの實在を教へてすべての衆生をしてミオヤの聖意に關はしめて其御子たる自己であることを信じてミオヤの全きが如くに全き人に爲んが爲に教へを垂れ玉ふたのである。

されば釋尊はたとひ人類と同じく人の身を以て此世に出で玉ひしかども其御心靈の本體は法身常住の無量壽如來に在します。故に法華經に釋尊は御自分の御本體は宇宙の大ミオヤに在ます故に凭やうに仰せられてござる、「三界は我有にて其中の衆生は悉く皆我子である」と。三界とは欲界、色界、無色界、云換ふれば地界と天界と空界とにて即ち宇宙全體を指したるものにて此中の生として活けるものは悉く皆吾子であると仰せなされた。

佛教は一面は哲學的にて一方よりは宗教的である。
一の大ミオヤを哲學としては眞如とかまた法性とか第一義諦杯の種々の名詞を以て號てをるけれども、宗教としては宇宙全體を眞に活ける尊きものと信するが故に法身とかまた如來と云ふ名を以て大ミオヤを表明してをる。我等が眞實に活ける宗教心を

以て觀るときは宇宙に最も尊き唯一の大ミオヤの實在を信せざるを得ぬ。唯一の大ミオヤに在ますけれども如來は三身に分れて在ます。ミオヤの三身の義を讀者は能く會解し玉へ。三身とは一に法身、二に報身、三に應身であります。

法身とは毘盧遮那、即ち徧一切處と稱へて宇宙全體を普く一の活ける如來としてピルシヤナ如來と號けます。同じく法身と云ふも哲學的の教では法身とは只理法身、智法身杯と云て宇宙に存在する處の理法であると説てをる。宗教的に法身を教へてをるのは眞言のピルシヤナは宇宙全體の地水火風空の物質の方面は是ピルシヤナの身體なので、宇宙に徧滿する心を識大と申して物質と心質とを合してピルシヤナで即ち宇宙全體をソツクリ此まゝ活ける法身佛と仰いでをるのである。

法身佛は何處に在ますと云はゞ宇宙全體を其まゝ法身と號けたのである。
楞嚴經には、如來藏妙眞如の性とは是天地萬物の本體なので一切の物質もまた人の眼の見ゆる耳の聴ゆるを始としてすべての人の心の作用もまた外の色も聲も香も其本は宇宙全一の眞如の性の作用である、之を宗教的に云はゞ法身の大ミオヤと名づく。して見れば私共の此形體も心も大本はみな法身から受たる物である、故に法身は天地萬物の大ミオヤに在ます。

報身としては私共衆生の心をして智慧と慈悲の光明を以て攝取靈化し玉ふミオヤである。報身を盧遮那如來と稱して、譯すれば淨滿また光明遍照と云ふ。即ち、アマタ如來が智慧と慈悲との光明を以て衆生の心靈を開きて清き善き人と爲さしめて下さるミオヤである。

宗教の客體としてはこの報身光明遍照の如來が最も大事なので、此のミオヤの光明を被りて私共が法身より受けたる心、心は喩へば鶏の卵の如くにて之を佛性と云ふ人を佛性の卵は有て居けれども之をあたためて孵化するやうに私共の心を報身如來は光明の中に攝めて麗はしき信仰心を復活させて下さるのが報身佛と申します。經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明も及ぶこと能はずとして一切諸佛の本佛として尊き處の如來である。此如來に無量光等の十二の光明の名が在して此光明こそ一切衆生を救ひて全き人として下さる御働きを有つて在ますの

である。

應身としては報身なる淨界より身を分けて此世界の人類に應同して人間の身を以て衆生教化の爲めに此世に出玉ひし教祖釋尊を應身と申します。

たとひ報身如來なる光明遍照の尊き如來は太陽の光明の如くに衆生の心を照し玉ふ如來在ますとも若し應身の釋迦如來として世に御出ましくは衆生は救はるゝとが出来ぬ。故に法身としては天地萬物の大ミオヤにて私共の體と心とのすべての大本なので、報身としては私共の法身から受けたる佛性の心をたすけて御子の徳を顯はして下さる御働きのミオヤにて、應身としては教祖釋尊即ち報身如來の光明に救はるゝ様に教の爲に此世に出ましたのである。故に此三身一つ缺くも私共はたすからぬのであります。故に一の大ミオヤなれども三つに分つと、法身を本の大ミオヤとし報身を光明攝化のミオヤにて應身の釋尊は教へのミオヤであります。此の三身は本一體の大ミオヤであります。

悉しい事は追々に述べます畧して三身につきて大ミオヤなることを述べました。法身の實在につきては若し哲學的に云はゞ天地萬物の、大は天體の星宿の循環の秩序整然たるを見るもまた萬物に條理あり秩序あるを見るも此萬物の天則秩序の統一的存在なくてはならぬ。萬物の法則の本體を宗教的に云はゞ大ミオヤとす。

また報身は信仰する人の心を靈化する働きを有ています攝取光明の如來の在ますことは釋迦如來を始め古今の宗教界の偉人らの精神の宗教的信仰の最も聖き尊き光明を放つ如きの心を成したるは宇宙には信仰する人の心を靈化する神尊の實在者が存在するが故なり。

例へば太陽の光に稻の實を成熟せしむる働きが存することは目には見えねども全く太陽の光熱によつて稻米の果は成熟するものである如く、如來の光明は人の精神を靈聖的に成熟せしむる働きを有てをる。故に古今の宗教的偉人等は皆光明如來の光明を被りて聖き信仰心が成熟なされたのである、故に大ミオヤの光明は全く人の精神を靈化し玉ふ力の存在することは古今の偉人の心に結びたる果を以て證することが出来る。

實は宗教は理論よりは實地である何人も至誠専心に如來を憶念する時は必ず自己の精神が如來の光明に靈化せられて生れ更つて實に光明赫々たる心の生活することが得られる。是實は自己の精神に於て證明すること確かである。

聖子の自覺

佛教は一切衆生悉有佛性とて何人にも佛性と云ふ最も靈なる聖なる如來の御子たる性を具てをる。故に我共は佛の子たる。共に人の子である。人間には兩性を具してをる。人の子としては有ゆる肉欲我欲の闇黒方面を有てをる。人は動物である故に動物欲の欲を持って動物欲を恣にせんとする欲を以てをる。他の動物のやうに本能的に犬は犬、馬は馬の本能のやうに質直ならばまだしも人間は智慧が發達しておる故に智慧までも用いて動物欲の眼の欲耳の欲また色食の慾を逞うせんとしたならば實に狡猾なる最も悪き動物である。然れども人には奥底に伏能しておる佛性と云木來佛の御子たる靈的性を具しておる。之を開發してそれが動けるやうになれば人は最も靈的に最も麗はしく最も清き精神生活を爲し得らるゝなり。

佛教の宗とする處は人々本具の靈性を開きてミオヤの光明の中にミオヤの聖意に契ふ人として眞に價値ある意義ある生活に入らしめんが爲めに佛は世に出玉ひしなり。

人は人の子たると共に如來の御子であることの自覺に入らしめんが爲めに佛は世に教を垂れ玉ふた。法華經に、一切衆生は悉く我子と仰せられ、また方便品に、諸佛如來は衆生をして佛の知見を開示して佛の正道に悟入せしめんが爲めに出世し玉ふと。意は人々本具の佛性を開きて佛の御子の徳を示さんが爲にと。

また梵網經には、人々が佛の御子であることを自覺せしめんが爲めに大乘戒を授く、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同じ已ぬれば眞に是れ諸佛の子なりと。意は自己に佛の性あることを正しく自覺した時が眞に是れ諸佛の聖子の自覺である。

若し唯人間は人間の子たるのみにして佛の御子の性徳を具有せぬものなれば佛の教

化を受けて如來の光明に攝取せられて光明中の生活に入ることができぬ。故にそこが大乗教の有りがたき處。何人も皆佛の御子なれば如來の光明に攝化せられ靈性開發して我は是佛子なりとの自覺がされる。また人間の子である本能も靈化する。こゝ成つて見れば人間の本能の欲も靈性の光りに照らされてよく自己を改造し鍛練する時は本能も純化する時は高等なる人間としての働を爲す。

人間の精神の奥底には無盡の性徳を具有してをる。何人も自分で自分の奥を究め底をたゞきて完全に發展させることは容易でない。

人の奥に有する靈性は無盡蔵を有して之を發展すべき機會を得て開發する。

先に大ミオヤに三身在ますと宣へた。然れば私共衆生は法身から受けたる靈性を有てをるけれども、即ち先に云た如く佛性は具有てをるも、鶏の卵の如く之を孵化して鶏とならざれば鶏として活用がきぬ。吾人が御子の自覺をせんには必ず大ミオヤの光明に攝化せられねばならぬ。是宗教の必要ある所以である。然らばいかにせば私共の靈しき心は卵の孵化するやうに靈き心が開發するとなれば、即ち一心にミオヤの聖名を稱へて恩寵の光明に攝化せらるんことを要す。之を經に、ミオヤの光明は徧ねく十方一切を照し玉ふも唯念佛の衆生を光明の中に攝取して捨玉はずと。専らミオヤの聖名を口に稱へ、意に専らミオヤを憶念して不斷に絶ざれば如來の大慈悲の光に融化せられて漸々に信仰心が熟して、喩へば卵の中味が雞の形つくりてつるに開裂して雛と爲る如くに、心靈が喚起し來れば我は是佛の御子なりとの自覺が感じえらる。

讀者諸君よ誠に〜に御勸め申します。君の奥底に伏する靈性が何とか機會を得て覺醒して活んとして蠕めいてをるではないか。然るをあなたが唯肉の我見と、我慢などの爲めに欺かれて闇黒の中に押込られてをつて光明赫々として開裂しきれんのは實に可惜ではないか。我は人の子たると共に大ミオヤの子であるといふ自覺の光を以て人の子たる自己の本能を醇化し宇宙廣大なる中に立つて大ミオヤの子なりと叫び玉へ。

若し一りの大ミオヤの御子との自覺できれば一切の人類は悉く眞の同胞なりとの

信仰が立ちます。

只一國民のみに限らず一切の人類は悉く一の大ミオヤの御子なればすべては同胞である。人の子としての我は兄弟三人また五人。若し我は大ミオヤの御子なりとの自覺の下には四海兄弟のみならず一切人類は全く靈の血の通ふ同胞にて相互に慈心を以て相向ひ相愛し合ふことが出来る。

眞に愛する我らが同胞よ、疾く君の奥底に潜める靈性の覺醒して、我大ミオヤよ、我らが靈き同胞衆よと心の底から此聲の發する日の一日も疾く來らんことを祈ります。

光 明

ミオヤの光明とは如何なる相にてまた何なる働きを用て居るものぞとの間に對して、光明は佛敎にて色光、心光の二種に分てあります。大ミオヤには兩方の光明有り。色光とは即ち太陽の光の如く肉眼にて見へる光にて心光とは心の理を照らす光なのである。

兩面に亘つてをるけれども、今正しく私共が被むる處の如く光明は精神の方面に受る處なれば、ミオヤの光明には悉くは十二通りを命じ其光明の徳が十二通り明かに分て最も確實に私共の精神を照す光明在まされども今は略してミオヤの光明を太陽の光に比較して我らが心を照らす光明の眞理を説明します。

太陽に光熱化の三線に比例して、如來に智慧と慈悲と威神との三光あり。ミオヤの智慧光は太陽の光線に比すべく、日出づれば世間が普く明るくなるは光線の方に依る、山河大地一切の植物等が歴然として現はる。ミオヤの智慧光は人の精神の知力を照らす處の光明なれば人々信仰に入て如來の光、智慧光の下に入れば、たとひ迷ひの凡夫とは申し乍らも、道理に明るく、愚痴が出でず、物に明らめがつき、また因果の理を信知し、また如來の實在を信じ、今世後世の事に確信して疑はず、尙進んでは佛知見を開きて如來の實在を見し如來の一切の眞理をも信じて疑はざるに至る。次に太陽の熱線に比すべきは如來の慈悲である。慈悲と云ふものは心の最も暖温なるものに

て他の苦悶にあたるに同情し他人の苦を抜き樂を與へんとの同情である。世に慈悲も同情もなき人の心を冷酷と云ふ。然るに世にミオヤの慈悲ほど一切の人類に對して暖かなるものはない。私共一切衆生の爲に無限の同情を以て苦を抜き樂を與へるのは即ちミオヤの慈悲である。されば春和の暖温なる氣候を被むれば桃季の花咲く如く、如來の慈悲の光明を被むれば信心の花開きて春風駘蕩とも言はれぬ樂しき心の花の開きたる生活のできるは、如來の熱線を被むつた故である。斯の如く人の精神に歎喜と妙樂と平和とのあたたかなる慈悲を以て衆生の心に與へ玉ふ故に如來の慈悲は太陽の熱線に比すとす。

ミオヤの威神は太陽の化合線に比す。

太陽には化合線がありて化學作用を起して、例へば作物に肥料を施すとたとひ其肥料が土中に在るとも太陽の光の化合線にて肥料が分化して土中にありて夫を植物が食物として夫で植物は益々培養せられて成長す。すべて日光に合ふて變化を起すは化學線の功能である。

ミオヤの威神力は人の精神の意志の惡質煩惱でも光明に溶すれば變化す。恰も柿の果の澁をも日光に乾燥する時は澁が甘干と成りて澁の深き程遠つて甘味を作すが如く、人には何なる者にも煩惱の澁のなきはない。(貪瞋嫉忌憎忌愚痴等のすべての弱點を煩惱と云ふ)

人は煩惱の爲めに自ら煩悶し憂怖し苦惱す。而して他人にも忌嫌せらる。自ら苦しむ他に嫌はるゝ煩惱は何人も有てをる。されども斯煩惱あればこそミオヤの御慈悲が有がたく感じらるゝなり。されば決して我は煩惱深しと悲しむ勿れ、自暴自棄する勿れ、其の煩惱の澁があればとて如來の光明に依つて靈化せられて澁が變じて甘乾と爲るが如く、人の心は信仰に依つて一變する、人格は一轉する。諺に惡にも強きは善にも強きとは宗教に入たる人に於ても多く見るべきである。

或る男子は非常に疝癩持にて毎日二三回位はをこらぬ日はない、家族も是には大に恐れて居つた。然るに一度ミオヤの光明に觸れて心機一轉して半年を経れども未だ一回も悲を起したることなきを家族の者は大に悦びて語れり。また或婦人は非常に

ヒステリーの爲に常に自ら悶えて惱むのみにあらで主人も大に困じて居りしに然るに一たび信仰に入て其性質一轉して實に生れ更りし人となれり。ミオヤの光明に觸れて人格を變化せしむること恰も太陽の化合線の如し。是で太陽の三線に比してミオヤの光明の徳を明せり。

ミオヤの光明の存在につきては實には理論よりは人々自ら一心に念佛して自ら光明に觸るゝ時は冷暖自知、自ら實際の上に信せざるを得ざるに至るのである。

經に其れ衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歎喜踴躍して善心生ず、

全くミオヤの光明は之に觸るゝ者をして人格を一變せしむ。

諸君よミオヤの光明は實に天地に充滿し外に計りてなくあなたの身の中にも充塞して居る。あなたが至心に念佛する時は必らずあなたの精神中に活躍せん。

光明の要ある人

すべての人は太陽の光が無くては叶はぬ生物である。太陽なくては活きることが叶はぬ。いかに眼か有ても太陽なくては物を視ることができぬ、夫と同じく我ら心靈に活きんと欲するならば是非ともミオヤの光明に由らなくてはならぬ者である。我らは現に闇黒である。何れより人に生れ來り死して何に趣向するか自ら明かに分からぬ。闇から闇に迷ふ凡夫である。ミオヤの光を仰ぎて初めて我らは光明の生活に入ることが出来る。

大ミオヤの聖旨を知らせたまふ

我等すべての活とし活ける物の一の大ミオヤ在ます眞のミオヤの聖意を私はずべの同胞の衆に御知らせ申したい。世の中に親なき子慘な物はない。私共の此形體が生きて人並の身と成つて今日に開けたる世に處ることできるのも此形に就かは全く親の恵であります。其れの如くに私共の心の中心に在る心靈の大ミオヤは如來さまであります。されば釋尊は佛は是世を救ひ玉ふ慈悲の父なりと念へと仰せなされた。

私共は心靈を救ひ玉ふ慈悲の父を離れては清き人と爲ることはできません。私共が只此肉體にのみ活きて靈に活きることであれば狡猾な動物に過ぎませぬ。

如來の慈悲の乳を飲つて信仰に活て見玉へよ。眞實に心廣く體胖かに限りなき有難さと平和との日暮ができます。

世の人々は是程確かなミオヤの實在を自ら信知せずして疑がつて眞から信する心の起らぬのは何故であらう。大ミオヤの恩寵の光は眼には見へぬけれども自己の靈性即ち信仰心さへできれば疑ひたくも疑がふことができぬ。然らばいかにせば大ミオヤを信するやうに成られませうとならば、そこを私は眞から貴下に御聞せ申たいのです。どなたでも如來の實在を始めは只道理の上で計り聞て而して眞實に信仰の實が得らるゝと思ひますが實は夫は大なる誤であります。

衣

世の塵に汚れぬ無垢の衣にも

なほ心して染むまじものよ

あやにしき身にまよふとも心には

ふすまなき身の夜寒あはれさ

大ミオヤの慈悲の衣に覆はるゝ

身はとことばにあなたたかにこそ

あたゝかな慈悲のふすまをかさねきて

ほとけのなかに臥するたのしき

たち縫も自づと爲せる妙服を

着くる心はとはに安けれ

みほとけの清き光を衣とし

念の玉をばかざりとはせん

白妙のきよき衣をまとふ身は

染まじものよ能く心して

八億の念の玉をばかざりとす

妙なる衣着つる光榮に

罵詈の矢もそしりの丸も通らぬは

慈悲の衣をきればなりけり

のゝしりの言の丸も通らぬは

忍の衣あつければなり

いかばかり鋭どき矢をも通さぬは

忍の衣きればなりけり

活業にはげしくせめぐ世にありて

忍の衣ぬかまじものよ

いかばかりはげしくせめぐ世の中も

忍の衣貫く銃丸はなし

食

(其一)

永遠につきぬ命を養ふは

阿彌陀ほとけの糧にぞありける

みおやより受けし命はみおやより

賜はるかてによればなりけり

法の味さまやのこんずばかりなり

聖きいのちを養ふかてには

大みおやの恩寵を思ふをもひにぞ

きはみつさせぬ味ひはあれ

言の葉につくせぬばかり妙なるは

念佛さまやの味ひにこそ

海山の味ひつくせし人にて

佛の味はひしられざりけり

たましひの糧だになくば何かせん

たとひからだはこえふるとも

たましひを受けたる甲斐やなからん

つきぬいのちの糧をうけずば

大みおやのめぐみの酒に酔ひぬ身は

世のうきことも思はざりけり

大みおやの醍醐の味をのむ人は

常にたのしき心なりけり

食

(其二)

汲みかはすさまやの玉の杯に

月をやどして飲まんとぞ思ふ

今はまたさまやの酒をのまざれば

一日だにもすごしかねつる

いかばかりのみてもついに盡ぬかな

我はとけより賜へる酒は

世のことはさもあらばあれ我はたゞ

三まやの酒をのみてくらさん

いかばかり味ひてもつきせぬは

みだより流れ出つる泉か

大みおやのみむねより湧く水なれば

のみてもつくることなし

をもひにもまた言ばにも及ばぬは

三まや味はふ心なりけり

櫻花さくいろにたとへん

法悦の妙へなる味をおぼへては

人と生れし甲斐やなからん

住

(其一)

かゝやける玉の宮居もなにかせん

みおやに安き栖居なからば

常はに住む神の宮居のなきものは

いと貧しき者にて有ける

大みおやの玉の宮居を宿とせば

いかばかりかは心安けれ

はてもなきかぎりもあらぬ大空に

みてるめぐみを栖かとはせん

あみだ佛と共にすむ身は法界が

わが胸なるか胸がみそらか

今はたゞ世に恐ろしきこともなし

大みふところすむ身なりせば

世の中に鬼てふものはなしといふ

己が心にすむを知らずに

恐ろしき鬼と住むこそ苦るしけれ

佛のなかのころやすきに

のどけさを何にたとへん大みおやの

みどの中にするころは

住

(其二)

本よりもみおやの中に在りながら

迷ひの雲のへだてこそすれ
迷ひより娑婆とは見ゆれさとりなば

皆このまゝに淨土なりけり
常に照る光のなかに栖む人の

心はとはにのどけからまし

極樂を西にあるとはいふものゝ

さとする心の我名なりけり

さとりなば何處も無爲のみやこなり

たゞ西方とのみなをもひそ

ゆくすへのみ國とのみな思ひそ

今のこゝろのすまひなりせば

寂光のみやこも己が栖かとは

みおやを知りてのちに知らるれ

此にある密嚴淨土しられぬは

ひとりのみおやまだ知らぬゆへ

寂光のみやこといふも外ならじ

みおやのなかの異名なりけり

會報

●京都帝國大學光明會

來れ光を求めて

佛教とし云へば直に耳を外向け、眼を蔽ふのが現代人の共通心理である事を我々はよく知つてゐる。それだからこそ我々は尙更聲高く叫ぶ。

諸子よ。佛教の眞髓は決して諸子が憶惻せらるるが如きものでない。我々は過去の似而非佛徒が爲した醜惡と不正とを忌むの餘り、其本體を見ることを怠つてゐた。成程、過去及現在の佛教徒の行爲に矛盾、虚偽不義其他有ゆる醜惡が數限なく在つたろう。我々は極力、それを糾弾する。然し佛教の更生は如此、徒なる排撃糾弾からは生れはしない。何故に過去の佛教が墮落したか、それをよく考へて見るが、其處に多くのことが暗示されてゐる。

諸子よ。諸子が佛教に於て唯喫すべしと爲す總てのものを取除いたつて、佛教は滅びるものでも何んでもない。佛陀の教は永遠に吾人の前に眞理として残る。取除けるものは取除けよ。其處に獨り佛陀の眞理が光輝を放つ。

我々は佛教の形式や形骸を追ふものでない。總ての障礙なる形式よ傳統よ、速に滅盡せよ。我等の求むる所は佛陀の眞生命に肌で觸れ合ふことだ。佛陀が如何に訓へ、如何に行爲したかを通じて吾人が生命の、神秘の扉をは開きてこゝに生命の糧を求むるのだ。然し乍ら吾人は現今の所謂新興佛徒がなす如く、佛陀の教を概念的遊戯の對象と爲して得々たるものでない。否寧ろこれこそ實に恐しき、冒瀆だと信ずる。我々は自由だ。眞裸だ。吾人を束縛する何等の桎梏もない。只我々の全我が只豁然に一直線に信仰の白路を突進するだけだ。眞理の前に只ひれ伏すだけだ。

諸子よ。信仰は理論でない。熱だ。火だ。概念でない。觀念でない。直觀の世界だ。體験の世界だ。

諸子よ。諸子が脈管の内には確かに父祖から傳へられた佛教の萌芽が潜んでゐる筈だ。舉世滔々として利欲に起り、權勢に赴く。思想は渾沌として歸趨に迷ひ。社會組織は動搖して強弱岸に闇ぐ。呪咀の聲のみ頻りにして愛の呼聲、慈悲の抱擁は聞くべく、求むべくもない。暗黒だ。黒闇だ。

願みよ。諸子が父祖の額には如何に敬虔の光が充ちしかを。彼等の身體は信仰に波打つてゐたのだ。そして其當時の彼等の社會が如何に美しかりしかを。

そうだ諸子の身體の中には美しい信仰の萌芽が光を待つてゐる。我々はそれを光にあてさへすればよいのだ。それを佛陀の教てふ光明に觸れしめればよいのだ。そこで、我々は真理より投げ與へられる、慈悲と知慧とに依つて無限に育てられる。

信仰と恩寵と感謝に依據しない總ての人間の所産は結局嘘だ。如來の光明に生きることに依つて生れた者のみが眞實の價値をもつ。そしてこゝに本當の無限の幸福、不變の幸福が生れる。今切實に求められつゝあるものは信仰恢復なのだ。總ての現代の我々が持つ悩みは釋然として氷解する。そして我々の生命は永久に連る。無久の幸福に連る。

諸子よ。刹那の現實を追ふ其手を胸に置いて冥目せられよ。必ずや諸子の心の中に吾人の言に共鳴し汾涌するものがあるのを信じて疑はない我々の生命の糧たる佛陀の教を信ずることは我々日本人の生命恢復であると同時に又我々若き者共の父祖に對する務であり又人類平和に對する必須の貢物でなければならぬ。

心清き友よ。我々は貴方を信ずる。願はくは我々と共に「信」なる唯一の貴い絆に依つて結ばれつゝ涅槃の岸に幕進されんことを祈る。

帝 大 光 明 會

世は擧げて活氣漲る新緑の候となりました。

天地は新なる生の創造に全力を捧げて助力してゐます。

一刻一刻一瞬一瞬断え間なき緑の活動。

すべては生きてゐます。

さうして生の完成に向つて心行くばかり其の力を表現してゐます。

私達がかやうに全我を投じて悔ない眞實をもつてゐませうか。

私達の魂はいつも永遠を見つめてゐます。

私達の魂はいつも希望に燃えてゐます。

然し果してどの程度迄其の理想が實現されてゐますでせうか。

私共の魂は此の矛盾に寂寥を感じてはゐないでせうか。

私共の現實を見つめるならば、

シヨーペンハワリーの云つたやうに

『果しなき曠野を過ぎ行く一片の黒雲見たやうに其の前後は光り輝いて現實はいつも暗い影を投じてはゐないでせうか。』

私共の理想は概念であつてはなりません、概念は無常です私共に眞の力を齎らしませぬ。

三千年前釋尊は人生を洞觀して衆生に告げました。

『眞實に口説めた者のみが眞の幸福を獲得するであらふ』と。私共の不幸とは失敗で

も病氣でも貧乏でも死でもありません。

眞に全我を投じて悔ない眞實を有せぬ事です。

今回の熊野師の御講演は必ずや之の問題に觸れて諸君の心琴にその微妙の共鳴を齎らす事を信じます。

どふか一夕の時間を是が爲めに御割き下さい。(以上ピラの文を茲に採録す)